様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５２０４０５

研究課題名（和文）《感染》という表象の感染拡大に関する研究

研究課題名（英文）mutation and spread of image of infection

研究代表者
神尾　達之（KAMIO, Tatsuyuki）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：６０１５２８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：エイズは、①免疫不全を引き起こす点で、ヒトの身体レベルにおける自他の区別を無効にする病であり、かつ、②当初は性行為による感染がクローズアップされた点で、《他者》たちとの《つながり》の病であった。「エイズ」は単なる感染症の名称にとどまらず、《他者》による自己の侵犯をめぐる表象である。本研究はエイズから始まる《感染》の表象が、寄生、共生、インターネット、sns、微生物、絆、ともだち、ゾンビなどのイメージに転移することで、突然変異を繰り返し、変奏されるプロセスを考察する。

研究成果の概要（英文）：AIDS is first, as it causes immune deficiency, a disease that erases the difference between the self and the others in the body of a human being. It is secondly, as sex was initially highlighted as a source of infection, a disease that is caused by relations with the others. AIDS is therefore no term for an infectious disease more, but an image that implies a invasion by the others. This study considers the process in which the image of infection mutates and varies to parasites, symbiosis, Internet, social networks, microbes, connections, friendships, zombies.

研究分野：複合文化学

キーワード：表象　感染　他者

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者の研究前史：研究代表者はすでに 2003 年から 2004 年にかけて、《感染》の表象に関する予備的研究を行った。その後、《感染》をめぐる新たな表象が次々に登場し、予備的研究で得ることのできた暫定的な考察枠が不十分であることが判明した。現時点もなお《感染》をめぐる文化現象と社会現象は次々に登場している。

研究代表者は上記の理由から《感染》の表象に関する研究を 2005 年以降中断したが、その間、二つの視座から《感染》の表象をめぐる問題系に属する《他者》の表象の考察を開始した。

一つは、観相学に関する研究である。《他者》の身体はまず顔にあらわれる。観察主体は《他者》の内面を知るために、顔というメディアの安定的な解読を可能にするコード表を求めてきた。これが観相学の歴史である。しかし近年、身体加工のテクノロジーが洗練されたことで、メディアとしての顔と内面との関係が恣意的になってきた。《他者》はますます読みにくくなった。

もう一つはピュグマリオン的欲望に関する研究である。ピュグマリオン的欲望とは、実在する《他者》（女性）が理想にかなっておらず、かつ自分の意のままにならないので、自分の理想像を体現し、かつあらかじめ自分の意のままになる《他者》を構築しようとする欲望のことである。

この二つの研究にいわば迂回することで、研究代表者は《感染》の表象を《他者》への不安とその克服のプロセスとして捉えなおすことができた。すなわち、《感染》の表象を、一方で《他者》が自己内に浸透し自己のアイデンティティが崩壊する様態として、他方で自己が身体的な輪郭線を破って無数の《他者》と連結しうるネットワークへと拡張する様態として理解する足がかりができた。

（２）本研究の先行研究と呼ぶことのできる最初の論考はダン・スペルベル『表象は感染する―文化への自然主義的アプローチ』である。ただし、1996 年に出版された原著のタイトルが"Explaining Culture"であることからも分かるように、スペルベルの研究は《感染》現象そのものではなく、文化が生成するプロセスを「表象の感染」として説明することを目的としていた。後述するように、本研究も表象の感染という問題を副次的に考察するが、主眼は《感染》という表象にある。

ルート・マイアーとブリギッテ・ヴァインガルトが編集し、2004 年に出版された論文集"Virus! Mutationen einer Metapher"（ヴィールス！　メタファーの突然変異）は、《感染》をめぐる言説を医学の領域から解き放った最初の学際的な論考である。ただし考察の射程はあくまでもメタファーとしての《感染》にとどまっている。

同年、歴史学者フィリップ・ザラズィンが発表した"Anthrax. Bioterror als Phantasma"（炭疽菌：ファンタスマとしてのバイオテロ）は、《感染》が表象となることで、それが身体的なレベルを越境して、《感染》への恐怖として感染拡大するプロセスを明らかにした。

性病のみならず肥満も笑いも感染するというのが、ニコラス・A・クリスタキス、ジェイムズ・H・ファウラー『つながり―社会的ネットワークの驚くべき力』のテーゼの一つだが、ここから、ウイルス等の身体レベルの媒体（メディア）と噂やウェブなどの非身体レベルの媒体（メディア）とが等質的であることが導かれる。本研究の問題設定と重なる部分が少なくない。しかし、本研究は、身体レベルの感染と非身体レベルの《感染》が事実上等質的であるかどうかを探るのではなく、二つのレベルが表象によって通底してしまっていることを明らかにし、狭義のネットワーク論に照準を合わせるのではなく、自己が見知らぬ他者たちによって脅かされると同時に、自己が見知らぬ他者たちと接合して拡張していくという、自己の境界線の消失に着眼する。その上で、先行研究が射程に収めていない 1990 年代以降の日本の作品を考察対象にすることで、欧米と日本の《感染》表象の違いについても考える。

２．研究の目的

本研究は、狭義には医学の分野における疾患の一名称である《感染》が、メタファーとして（「危険思想に染まる」など）のみならず、《他者》が自己内に浸透し自己のアイデンティティが崩壊する様態と、自己が身体的な輪郭線を破って無数の《他者》と連結しうるネットワークへと拡張する様態とを示唆する表象として、様々な文化現象（文学・映画・マンガ・思想・コンピュータプログラムなど）にモティーフやテーマを供給したプロセスを分析し、この感染拡大のプロセスが 1985 年以降に開始し、1995 年に新たなフェーズに入った理由を考察することを目的としている。

３．研究の方法

（１）疫病に関する文字情報、図版、映画、文学、マンガ等を対象領域として《感染》の表象を収集し分析する。

（２）《感染》の表象の派生形である、免疫の表象、微生物・寄生虫の表象、コンピュータウイルス、「電波系」と呼ばれた神経症の言説と表象に関して資料を収集し分析する。

（３）《他者》が自己内に浸透し自己のアイデンティティが崩壊する様態と、自己が身体的な輪郭線を破って無数の他者と連結しうるネットワークへと拡張する様態とを示唆する《感染》の表象が、様々な文化現象にモティーフやテーマを供給したプロセスを分析する。

４．研究成果

《感染》という表象の感染拡大は、Acquired Immune Deficiency Syndrome（後天性免疫不全症候群）がエイズという名称を得た 1980 年代半ばから始まる。エイズは、①免疫不全を引き起こす点で、ヒトの身体レベルにおける自他の区別を無効にする病であり、かつ、②当初は性行為による感染がクローズアップされた点で、《他者》たちとの《つながり》の病であった。この二点からエイズは単なる感染症の名称にとどまらず、《他者》による自己の侵犯をめぐる表象になった。エイズは 1980 年代の後半には、思想の領域でもしきりに論じられるようになる。たとえば『現代思想　1987 年 9 月臨時増刊号：AIDS　アイデンティティの病い』、高橋敏夫＋柏木博『文化としてのエイズ　身体・メディア・権力』（1987）、ソンタグ『エイズとその隠喩』（1988）などである。《他者》による自己の侵犯という表象は、1989 年に連載を開始した岩明均『寄生獣』のモティーフとなる。ヒトの身体は謎のパラサイトによって乗っ取られ、その結果、ヒトとヒトは殺戮しあう。このマンガの連載が終わった 1995 年には瀬名秀明『パラサイト・イヴ』が出版された。ヒトの内部にいる《他者》としてのミトコンドリアが、内部からヒトを支配するという筋立てである。いずれにしても《他者》は自己をおびやかすおぞましい存在として思い描かれるが、その一方で、この頃、ヒトの体内に寄生する虫たちが、ときに親しく、ときに有益な存在としてクローズアップされるようになる。1993 年に目黒寄生虫館がリニューアルオープンし、翌年、館長の亀谷了による『寄生虫館物語』が出版された。同年、藤田紘一郎『笑うカイチュウ　寄生虫博士奮闘記』によって、寄生虫ブームが起こる。藤田は、ヒトの体内に生息する寄生虫たちは、私たちにとって親しいだけでなく、私たちが生きる上で必要な存在であると主張する。

このように 1990 年代前半には、ミクロな《他者》からの侵犯に対する恐怖が大きくなる一方で、ミクロな《他者》との共生が説かれるようになる。1995 年、不可視の《他者》たちとの無限の《つながり》が開始する。Internet Explorer Ver.2.0 が公開され、Windows95 が発売されたことで、《つながり》の可能性が幾何級数的に上昇した。同年、劇場公開された『GHOST IN THE SHELL 攻殻機動隊』のポスターでは、主人公の身体には多くのケーブルが装着されている。1998 年に出版された村上龍『共生虫』では、エイズの表象が含意していた《他者》たちとの《つながり》に対する恐怖感があいかわらず描かれているが、1990 年代の後半には無線 LAN の規格が統一され、携帯電話の加入者数が爆発的に増加し、不可視の《他者》たちとの《つながり》が、多幸感をもたらすようになる。《つながり》は、たとえば HI ウイルスやパラサイトとつながってしまうという受動性から、インターネットによって任意のサイトにつながることができるという主体性へと変じた。

このような多幸感は、00 年代の半ばから爆発的に流行した sns（2004 年 mixi、Facebook；2006 年 Twitter；2011 年、LINE、Google+）によってさらに高まっていった。

《他者》による自己の侵犯をめぐる表象は、恐怖感から多幸感へと変じていったが、このような変化のなかで、2000 年に入ると、ミクロな《他者》が新たな意味を帯びるようになる。1999 年から 2008 年まで連載された漆原友紀『蟲師』では、主人公は菌類や微生物よりも小さいとされる「蟲」を見ることができる霊能者である。「蟲」は人々の生活を乱すこともあるが、「蟲」が排除されるわけではない。「蟲」との共存が説かれる。2004 年から 2013 年まで連載された石川雅之『もやしもん』でも主人公は菌を肉眼で見ることができる。ここではさらに、醸造品の製造に役立つ菌はポジティブなイメージとして前景化する。『蟲師』と『もやしもん』では、微生物という《他者》との共生を声高に主張されることはなく、ヒトがミクロな《他者》とつながっていることが確認されるだけだ。

この時期、マンガとは別の領域でも、ヒトと共存しているミクロな《他者》がいわばクローズアップされるようになる。「常在菌」はエイズが新聞の紙面をにぎわしはじめた 1986 年には院内感染についての記事のなかでネガティブに記述されていた。しかし、1995 年以降は常在菌に対する評価がじょじょに高まっていく。2002 年以降は、常在菌の効用を説いた健康に関する啓蒙的解説書が次々に出版される。

2005 年に書かれた梨木香歩『沼地のある森を抜けて』のなかにも、ミクロな《他者》とヒトとの《つながり》をめぐるイメージがあふれる。ただし、ここでは同じイメージがちりばめられた同時代の他のテクスト群とは異なり、つながるヒトの自己意識が問題になる。それは、1980 年代中頃から 1990 年代の終わりにかけて、《つながり》が受動性から主体性へと変じたフェーズの次のフェーズが来たことを示している。この小説を貫く問題意識は、梨木がこの小説の前年に発表した『ぐるりのこと』というエッセイに記された「群れへの回帰性と個への志向性のようなもの」との両立の可能性である。《つながり》は直接的に生きられるだけでなく、ヒトならぬ人間によって対象化されることになる。

21 世紀に入ると、《つながり》が人間と人間との密接な関係という表象にも転移する。ただし、ここではまず、《つながり》は《つながり》の不在として感知される。2010 年、NHK で放送されたテレビ番組がきっかけとなって、「無縁社会」という言葉が流行した。「無縁社会」とは《つながり》が欠如した社会のことである。これ以降、「絆」がしきりに口にされるようになる。「絆」は 2011 年の「新語・流行語大賞」を受賞した。《つながり》

が欠如しているがゆえに、《つながり》がさかんに勧められる。しかしその一方で、香山リカ『絆ストレス 「つながりたい」という病』(2012) や中島義道『反〈絆〉論』(2014) のような《つながり》批判も出てくる。

《つながり》へのアンビバレンスをもっとも強く観察できるのは、個性を伸長することを奨励される一方で、帰属する集団の「空気」を読まざるをえない若者たちにおいてである。梨木の言う「群れへの回帰性と個への志向性のようなもの」のアンバランスに悩む若者たちにもっとも強くうったえかけたのが、1997 年に連載が開始した尾田栄一郎『ONE PIECE』だ。安田雪によれば、「誰もが持っている「かけがえのない仲間がほしい」という欲求が、ワンピースをモンスターマンガに押し上げた」(安田雪『ルフィの仲間力』(アスコム、2011) 3 頁)。『ONE PIECE』が人気を博している裏側には、《ともだち》を作ることが困難な状況がある。高見広春『バトル・ロワイアル』(1999)、浦沢直樹『20 世紀少年』(1997-2006)、テレビドラマ『ラスト・フレンズ』(2008) などでは、若者たちの《つながり》の陰画が描かれている。2009 年に発売されたニンテンドーDS 用ゲーム「トモダチコレクション」では、プレイヤーが自分自身の分身や友人の分身と交流する姿を、メタレベルからモニターすることが可能になる。2012 年には「レンタルフレンド」という有料サービスが登場した。数万円のサービス料を支払えば、一定時間《ともだち》が出現してくれる。「レンタルフレンド」の利用者の多くもまた若者たちである。このような《ともだち》関係の陰画をドラスティックに描いているのが、2014 年に連載が始まった山口ミコト (原作) ＋佐藤友生 (漫画)『トモダチゲーム』である。《ともだち》は自分が生き残るための道具であり、《ともだち》は金銭のように計量可能なものとして描かれる。

《ともだち》がいわば虚点として前景化するような文化現象や社会現象があらわれたのと同じ頃、若者を対象とした《ともだち》論があいついで刊行された。特徴的なことは、大多数の論者が《ともだち》を全面肯定せず、むしろ逆にそれらに対して批判的であることを勧めているということだ。《ともだち》がいないことが、主体が劣っていることの指標にはなっていないことがことさら強調される。このことは逆に、それだけ《ともだち》の重要性が若者たちに感じられてしまっているということを浮き彫りにしている。

インターネットから sns に至るまで《つながり》のテクノロジーが開発されたことで、《ともだち》は増え、《ともだち》は計量可能になり、《ともだち》の数と配置を時々刻々観察することもできるようになった。その一方で、主体は《つながり》のなかでの自らのポジションにたえず汲汲とすることをしいられる。

sns が登場し流行しはじめた 00 年代の半ばあたりから、ウイルスに感染した人間が他の人間を襲うという、いわゆるゾンビ物がサブカルチャーの中で繁殖しはじめる。自己意識をもたないゾンビたちは《つながり》のなかで自己定位することはない。直接的に、つまり肉体的に、ただ《つながり》を繰り返すだけだ。エイズとは異なり、ゾンビ現象においては、《他者》による自己の侵犯は、悲劇にはならない。2009 年に連載が開始した花沢健吾『アイアムアヒーロー』では、自他の区別が無効になることは、むしろ悦ばしき共同体の実現として感じられてしまう。ネグリとハートによれば、「グローバリゼーションの時代とは、世界的な感染の時代」(アントニオ・ネグリ＋マイケル・ハート (水嶋一憲他訳)『〈帝国〉―グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』(以文社、2003) 182 頁) である。それと同じように、ゾンビたちの肉体的な結合による共同体は、主体が《つながり》の共同体を構成する個々のノードになってしまうフラット化した世界にほかならない。

エイズというウイルスから突然変異を重ねた《感染》の表象は、今や、個別的な主体を飲み込み増殖する全体という《表象》へと変貌する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
神尾達之「つながりのつながり　―微生物、ともだち、ゾンビ―」『早稲田大学　教育・総合科学学術院　学術研究（人文科学・社会科学編）』(64)p.241 – 260。2016 年 03 月

〔学会発表〕（計　　件）
なし
〔図書〕（計　　件）
なし
〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）
なし
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）
なし
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者　神尾　達之
（KAMIO, Tatsuyuki）
早稲田大学教育学部・教授
研究者番号：６０１５２８４９

(2)研究分担者　なし
(　　)
研究者番号：

(3)連携研究者　なし
(　　)

研究者番号：